

## 巻頭言

# 巨大自然災害から命を守る言葉

---

NHK アナウンス室副部長・人と防災未来センターリサーチフェロー  
横尾 泰輔

---

先日、ある在京民放の社員の方々に向けて講演する機会を頂いた。将来発生する巨大自然災害に、放送メディアとしてどう備えるかを考える勉強会だ。私は、自身の研究「東日本大震災の初動報道に関する当事者分析」(横尾・矢守「災害情報」2017)をベースに、災害時の情報伝達について考えを述べた。多くの参加者が熱心に耳を傾け、NHK・民放問わず災害報道重視の姿勢を改めて認識した。同時に、災害時にどう情報伝達すべきか模索が続く現状も痛感した。情報で人の命を救いたいと考える我々放送メディアにとって重要な命題の1つが、「自然災害から人の命を守る言葉はあるか」だと思う。そしてこの10年、私を含め多くの報道従事者がこの問いに向き合い続けてきた。

10年前の2011年3月11日、私は全国ニュース担当のキャスターとして、東京渋谷の放送センターで業務に当たっていた。14時46分、緊急地震速報の警報音が鳴り響き、フロア全体が激しく揺れた。私はスタジオに飛び込んでピンマイクを装着し、東日本大震災の初動報道を開始した。津波の予想や沿岸の状況、地震の被害、都心の混乱など、手元に入る様々な情報を取捨選択して伝えた。当時の緊急災害報道のマニュアルに即し、安全な高台への避難を繰り返し呼びかけた。地震発生から約30分、NHKの定点カメラが東北沿岸に続々と襲来する津波を捉えた。さらに、同時刻にマグニチュード7.6の最大余震も発生、事態の急変と膨大な情報に放送現場は混乱を極めた。数分後、テレビの中継映像は巨大津波に飲み込まれた街の様子を映し出していた。

それからしばらく、津波による甚大な被害を伝える日々が続く。増え続ける犠牲者数、家族を失った人々の悲しみ、避難所暮らしの疲弊。悲惨で過酷な状況を伝えるうちに、私は「多くの犠牲は自分の放送のせいではないか」という思考に陥っていった。あの時、「もっと強く呼びかけるべきだった」「人を動かす言葉はなかっただろうか」。NHKアナウンサーとして、自責の念と無力感に苛まれた。震災後はある種の罪滅ぼしの思いで、災害報道マニュアルの改訂や地域放送局の災害時機能強化などの業務に打ち込んだ。

東日本大震災から5年を機に、私は研究という形で改めて当時の放送に向き合うことにした。それが、冒頭に触れた「東日本大震災の初動報道に関する当事者分析」である。共

著者の京都大学・矢守克也教授の助言が、私の背中を押した。研究の柱は2つあり、1つが放送内容とキャスター心理の分析、もう1つが被災地の住民への聴き取り調査だ。これにより、情報の送り手と受け手の認識の違いを明確にし、課題解決のための実践的考察を目的とした。そして、住民の避難行動の誘発・促進に資する新たな情報伝達手法として、次の5項目を導出した。①インパクトのある表現(強い口調・キーフレーズ)、②発表情報・数値への解釈の付加、③教訓(リアルな事例)を盛り込んだ呼びかけ、④避難行動の段階的アプローチ、⑤津波映像の具体的実況描写と普遍化である。

例えば、上記②は、気象庁発表の予想高さの数値に具体的な解釈(「3mは人の背丈の約2倍」「家屋を破壊して押し流す」など)を付加したり、気象庁の予報区分より詳細な地名(「宮城県」のみならず「仙台市、名取市、岩沼市」など)を補足したりする。また、上記④では、自身が要避難者か否かを考えるよう促したり(「今いる場所の危険性を考えて」など)、可能な行動を段階的に提示したり(「高齢者はまず玄関先まで出て」「1mでも2mでも高い場所へ」など)する。こうした手法による情報伝達で住民に危機感・切迫感と当事者意識を醸成し、避難行動を誘発・促進するという考え方である。

研究過程で強く感じたのは、住民の思い込みの強固さと当事者意識の希薄さが避難行動を抑止していたということである。私は、当時放送で情報を知覚した住民がそれを元にどう行動したかを知りたかったのだが、情報を得たにもかかわらず適切な避難行動に移していなかった住民が圧倒的に多かった。そして、私を含め報道従事者側は、そのことに対する認識が不十分であった。住民の「遠浅の海岸には津波は来ない」「三陸の人は大変だなど思った」「海から離れた自宅は関係ない」などの証言に、意図したメッセージが伝わり切れていなかったことを痛感した。

さて、「自然災害から人の命を守る言葉はあるか」という問いに、私はもちろん「ある」と答える。そして、その前提として大切にすべきなのが、自然に対する畏怖の精神だと考える。震災後、ソフト・ハード両面において一層の有用な研究や実践が進められてきた。災害メカニズムの解析、防潮堤などの建設、市街地の開発・整備などにより、防災・減災は一定程度実現できるだろう。しかし、今後も自然は人知を超えた猛威を振るい、巨大自然災害に直面するたびに「想定外」「未曾有」などの語句が飛び交うはずだ。それは、日本の災害史を振り返れば自明であろう。容易には抗えない自然を正しく畏怖することこそが、将来発生する巨大自然災害に向き合う必須の姿勢ではないだろうか。そして、自然に比して極めて小さな存在としての人の行動を謙虚に支えるのが、いざという時に発する言葉なのだと思う。10年前のあの日の放送を経験した者として、これからも「命を守る言葉」の探求を続けたい。

## 参考文献

- 1) 横尾泰輔, 矢守克也: 東日本大震災の初動報道に関する当事者分析: キャスター自身による分析・調査と実践的考察, 災害情報, 15巻, 2号, 2017.